

校長室だより



令和4年2月14日

校長 齋藤 瑞穂

森林限界の手前～はるか高みをめざして～

北京冬季オリンピック大会に負けず、日本でも将棋界で熱戦がありました。将棋の八大タイトルの一つ、王将戦です。12日に行われた第4戦で、藤井聰太四冠（棋聖・王位・囲王・竜王）が見事勝利をおさめ、なんと王将を含む五冠を達成したのです。もちろん、史上最年少での快挙です。一昨年の7月に初タイトルを獲得してから、わずか1年半のことです。8つあるタイトルの5つを独占する強さはいったいどこから来るのだろう・・・無敵の強さにただただ驚くばかりでした。

そんな藤井五冠が、王将獲得から一夜明けた13日の会見で、こんなことを言っていました。「富士山でいえば何合目まで登っているイメージですか。」という記者の質問に答えたものです。



「将棋はとても奥が深いゲームで、どこが頂上なのか全く見えない。いまだ頂上が見えない意味では、森林限界の手前。まだまだ上方に行けてないと思います。」

森林限界とは、聞きなれない言葉ですね。私も知らなかったので、調べてみました。森林限界とは、森や林を作るような高い木が育たない限界のことだそうです。高い木が育つには、気温や土の

性質、白当たりなど、いろいろなことが関わってきますが、山で言えば高さが高くなればなるほど気温が低くなるので、木は育ちにくくなります。富士山では、2500メートルから2800メートルが森林限界なのだと。その高さを超えると、高い木々が作る林も森も姿を消し、空が開けて頂上が見えるのです。

つまり、藤井五冠の言う「森林限界の手前」とは、まさに森や林の中ということ。見えない頂上を目指して、ひたすらに登っている最中だということでしょう。もちろん、森の中ですから、迷うことも、思いもよらない危険に遭うこともあるでしょう。それも含めての発言だったかもしれません。

この言葉を聞いて、なるほど、そうかと思いました。このつくることのない向上心、探求心、もっともっとと高みを目指すチャレンジ精神こそ、藤井五冠の強さの原動力だとわかったからです。

現在の藤井五冠の強さは、歴代のタイトル保持者の誰もが認めるものです。現在のところ、ただひとり藤井五冠に勝ち越している深浦康市九段（元王位）は、藤井五冠の戦いを「棋力（=将棋を指す力）が突き抜けすぎて、もはや相手ではなく、自分との戦いになっているように見受けられる」（2月13日読売新聞より）と話したそうです。

ほかのだれでもない、いまの自分に勝ってさらに強い自分になる。明日は今日の自分を超える――。藤井五冠の挑戦は続きます。残り3つのタイトルを手に入れ、史上初の「八冠棋士」となる日も近いかもしれませんね。



保護者の皆様

今週末のランニング記録会に向け、子供たちは寒さに負けず練習に励んでいます。一方で、蔓延防止等重点措置期間が延長され、本校でも徐々に感染する児童が増えています。今のところ、記録会は校庭での活動なので公開の方向ですが、場合によっては公開中止の可能性もあることをご承知おきください。いずれにせよ、自己ベスト記録更新に向け頑張る子供たちへ、どうぞ励ましの声掛けをお願いします。